

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22730622

研究課題名（和文） 「保育の質」を評価するための保育カンファレンスに関する実践的研究

研究課題名（英文） The research of teacher's conference for evaluate a "quality of early childhood education and care"

研究代表者

松井 剛太（MATSUI GOTA）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：50432703

研究成果の概要（和文）：本研究では、「保育の質」を保育所・幼稚園で評価するために、保育現場における保育カンファレンスの分析手法の開発と、その有効性を検討した。第1に、ニュージーランドの Learning Story を参考に、保育者の省察を促す記録様式を開発した。第2に、テキストマイニングを使用して、保育カンファレンスの議論からキーワードを抽出し、評価に活用した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is the development of analysis method of teacher's conferences and its effectiveness to evaluate a "quality of early childhood education and care". Firstly, the form of records were developed which refer to the New Zealand Learning Story. Secondly, the keywords were extracted from teacher's conference discussing using text mining method and use of evaluation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：保育の質、保育カンファレンス

1. 研究開始当初の背景

「保育の質」は乳幼児期の子どもたちの暮らしや遊びを保障するために最も重要である。国際的にも保育の質の向上は急務の課題となっており、各国で取り組みがなされてい

る（秋田，2008）。

とりわけ、保育の質を評価するシステム整備が重要な課題である。今日、保育の質の評価システムに関して、第三者評価、学校評価等、政策レベルでの評価は充実していく中で、

これまで現場の保育者が保育実践を通してどのように保育の質を評価するのかについては、具体的な提案はなされていない。

保育の質は、「プロセスの質」、「条件の質」、「労働環境の質」の3種類に分けられる(大宮, 2006)。これまでの保育の質の評価は、客観的に判断可能な「条件の質」、「労働環境の質」を中心に進められており、実際の保育を評価するシステムがない。

保育実践は、「実践」⇒「想起」⇒「記録の記述(言語化)」⇒「解釈」⇒「再び実践へ」という5段階に沿って行われる(浜口, 1999)。このうち、評価は「記録の記述(言語化)」と「解釈」の部分に含まれる。保育実践を言語化し解釈する際、多様な視点からの評価が望まれる。そのためには、他者と対話する場を持つことが重要である。

プロセスの質を評価する上で有効な方法として保育カンファレンスが挙げられる(柴崎, 2008)。保育カンファレンスは、保育所・幼稚園の複数の保育者が、協議を通して、自身の行った保育を省察(reflection)し、次なる保育を創出するための有効な手法とされている(田代, 1997)。これまで、保育カンファレンスによって、保育実践の内省が促され、保育観の転換や保育実践の再構成がなされた事例が報告されている。しかし、保育カンファレンスで行われた協議が保育実践の評価指標となり得るのか、また、いかにして評価指標として活用するのか、そのような具体的な議論はされていないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、特に「プロセスの質」に関する保育の質を評価するために、保育記録の記述様式の開発と保育カンファレンスの分析およびその有効性を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 先進地の実地調査

海外での幼児教育・保育のスタイルには2タイプある。第1に、就学準備型(アメリカ・イギリス・フランスなど)、第2に、生活基盤型(ドイツ、フィンランド、ニュージーランドなど)である(泉・一見・汐見, 2008)。本研究では、生活基盤型のニュージーランドで保育所・幼稚園を訪問し、Learning Storyの活用について実地調査した。

(2) 保育の質の記述様式の開発

保育の質に関する議論では、質を越えた意味生成(meaning making)の概念が提起されている(Dahlberg・Moss・Pence, 2006)。意味生成においては、価値観を含めた対話や批判的思考、具体的な事例の描写、の過程がな

されなければならない。そこで、そのような過程を支えるための記述様式について開発した。

(3) 保育カンファレンスの分析

意味生成には、対話が不可欠であるが、保育現場において保育のことを語る保育カンファレンスの議論を評価として見える形にしたい。そのため、実際の保育カンファレンスの議論をテキストマイニングで試行分析して実施可能性を検討した。

4. 研究成果

(1) ニュージーランドの実地調査

Learning Storyでは、個々の子どもの発達や行為をヴィゴツキーにみられるようにその子どもを取り巻く社会・文化的な関係構造から読み解く理論的背景からとらえる(Carr, 2001; p5)。具体的には、子どもの学習成果を以下のように定義している(表1)。

表1: 子どもの学習成果

- | |
|---|
| (1) スキルと知識(Skills and knowledge) |
| (2) スキルと知識(Skills and knowledge)
+意図(intent)
=学習方略(learning strategies) |
| (3) 学習方略(learning strategies)
+社会的仲間と実践
(social partners and practices)
+道具(tools)
=状況に埋め込まれた学習方略
(situated learning strategies) |
| (4) 状況に埋め込まれた学習方略
(situated learning strategies)
+動機づけ(motivation)
=学習の性質(learning dispositions) |

以上のように、Learning Storyでは、子どもの学習成果を4段階の連続性からみる。各段階は前段階で得た成果を基礎に発展していく(Carr, 2001; p6)。

ニュージーランドのプレイセンターや保育所・幼稚園を訪問して、教師の話や聞きと、問題解決者(problem-solver)としての子どもを想定していることがわかった。これは、Learning Storyの理論的前提にある子ども観であり、さまざまな活動を媒介として学習を積み重ねていく存在として子どもをとらえている。保育の場においては、個々の子どもの自主的な選択による遊びが奨励され、大人はそれを促進させるための関わりや環境設定、観察に従事していた。教師は、子どもが十分に用意されたリソースから遊びを自主的に選択し、個々の学習を進展させている場面を見逃さないようにしていた。それは、Learning Storyにて、個々の子どもの学習を記述することが求められるためである。実際

には、1人の教師が5人程度の Learning Story を作成しなければならず、負担は大きいとのことであった。しかし、教師は幼児教育の独自性や幼児の学びを記述することに使命感を持って臨んでいた。また、Learning Story の作成に取り組むことで、教師は、自然と意味生成の過程を踏み、子どもの学びを読み取ることができるようになると思われる。

(2) 保育の質の記述様式の開発

本研究では、質を越えた意味生成の概念に立脚する。保育の意味生成は、厳格に進めていくことが重要である。幼児教育においては、以下の状態が含まれる (Dahlberg・Moss・Pence, 2006)。

- ① “子どもにとってのよい生活、よい幼児期とは”という問いを継続的に批判的に探究する中で、幼児期、幼児教育施設、教育に関する哲学を構築していくこと
- ② 批判的反省的思考を用いて、問いの生成や脱構築を図ること
- ③ ドキュメンテーションを批判的反省的思考の道具として使用すること
- ④ エンカウンターやダイアログを大切にして、子どもも含む他者の声を敏感に感じ取り、視点の転換を図り、互恵的に教育活動を進めていく
- ⑤ 多様な背景や経験を有するファシリテーターを教育活動に参加させ、評価判断 (実践知) を養う。例、レジジョでいうペタゴジスタなど。

記述様式に関しては、②、③が関連する内容となる。つまり、保育記録の様式は、保育者の批判的反省的思考を促すようなものが求められる。

本研究では、ニュージーランドの Learning Story に Parent's Voice という保護者の声を記述する欄があったことに着目した。そこで、Teacher's Voice という欄を作り、保育者が実際に行った保育について、そのときに意図していたことや感じていたことを記述できるようにした (図1)。

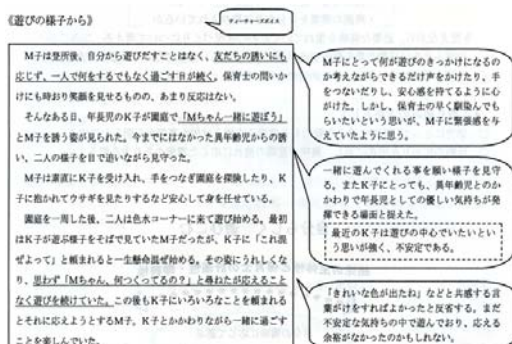


図1 Teacher's Voice の記述例

この様式を使用して、保育記録を残したことによって、保育者がそれまでより、自覚的に保育を振り返ることが促された。さらに、保育中にも自身の関わりがどのような意図に基づいて行われているのか、子どもの姿をどのようにとらえて関わっているのかを考えるようになったとのことであった。

これはつまり、保育後の省察 (Reflection on Action) だけでなく、保育中の省察 (Reflection in Action) も促されたことを意味している。ショーン (2001) によって提起された反省的実践家の概念は、専門家像として、行為の中の省察を求める。それは、まさに関わっている状況と対話することによって、不確かな状況を解決すべく即興的な実践を可能にする。

質を越えた意味生成においては、規定の質に向けて保育を構成していくのではなく、規定ではない状況を反省的思考によって新たな意味を見出し構成していくことが求められる。それには、保育者の省察を促す記述様式が重要であることが示唆された。

(3) 保育カンファレンスの分析

上記の記述様式を使用してもらい、かつ保育カンファレンスで保育者が語った内容をテキストマイニングで分析した。これは、議論を視覚化することによって、意味生成の一助とするためのものである。ここでは、ちょっと気になる S くんに対する関わりについての分析を述べる。

保育者にとって、ちょっと気になる S くん (2歳男児) は、自閉的傾向を示す子どもであった。S くんとの関わりについて、園内で保育カンファレンスを行い、定期的に検討を重ねた。テキストマイニングの分析は、7月までの保育カンファレンス (前期) と 12月までの保育カンファレンス (後期) のもので比較した。

実際にテキストマイニングを使用するとき、対応分析などは活用しづらいことがわかった。最も効果のあると思われる使用法は、単純に「キーワードの抽出」をしてピックアップしたキーワードに対する「コンコーダンス」(その言葉が使われている前後の文脈) を見ることであった。

本研究では、対象児であった「S くん」という言葉が保育カンファレンスでどのように話されていたか、7月と12月でそれぞれにコンコーダンスを調べた。その結果、7月の段階では、S くんの前には、問題行動やモノに対する興味が多く話されていたが、12月には、特定の保育者や他の子どもたちの名前などが見られた。つまり、S くんが、7月の時点では保育者と二人だけで関わることや、モノや場所を求めることが多かったが、12月には特定の保育者を拠り所としながらも、他

の子どもたちを意識するようになっていったというように、保育者はSくんの変化をとらえていたことがわかった。

その他にも、保育者が感じたSくんの変わったところとして、「言葉が分かる、話が伝わる」、「目が合うようになってきている」「保育者との信頼関係」「集団の中でのSくんの姿、他の子どもへの意識」「落ち着ける場所、集中できる場所の形成」、「感情表現」などが挙げられ、キーワードの抽出に加えてコンコードダンスを容易に見られる点において、テキストマイニングの活用可能性が見出された。

しかしながら、これは議論を深めるための材料に過ぎず、テキストマイニングで保育カンファレンスの議論を分析したからといって単純に評価とすることはできない。テキストマイニングを使用して、保育者の捉え方の傾向を把握したうえで、さらに議論を深めていくという方法が望まれるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

松井剛太 発達障害のある幼児への保育者の関わりがもたらす影響-巡回相談の事例にもとづく検討-. 香川大学教育実践総合研究(21), 25-33, 2010.

〔学会発表〕(計 1 件)

松井剛太 保育所・幼稚園におけるインクルーシブ保育-円環的認識論に基づく検討-, 日本発達障害学会第 45 回大会発表論文集, 114-115, 2010.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 剛太 (MATSUI GOTTA)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：50432703